

## 2016年ノーベル賞授賞式に参加して

日本生化学会会長 東京大学大学院医学系研究科 水島 昇

### はじめに

2016年のノーベル生理学・医学賞が大隅良典博士（本会名誉会員、2008年会頭）に授与されました。会員を代表して、改めてお祝い申し上げたいと思います。その発表をうけて10月3日からは日本中が沸きに沸きました。私は1997年から2004年までの7年間を大隅研でポストドクや助手として過ごさせていただきましたが、オートファジーの研究分野が成長していく真っ只中に居合わせることができた幸せを改めて感じると同時に、その後も含めて、これまでの20年間はまさしく興奮の連続だったと言えるものでした。それだけに今回の受賞は嬉しい限りなのですが、それをなかなか実感できなかったのも事実でした。「すごすぎて信じられない」という、まさか自分がそのようなものを持つとは思わなかった感覚と、これから大隅先生はどうなってしまうのだろうという余計なお節介と、まるで嵐のように次々と舞い込んでくる依頼や問い合わせへの対応などのため、大隅先生の受賞を心から実感できたのは12月10日のすばらしい授賞式においてでした。受賞決定から授賞式までの出来事を振り返ってみたいと思います。

### 発表当日と翌日

この約2年間の大隅先生の受賞歴は尋常ではありませんでした。一部ではありますが、2015年にはガードナー賞、国際生物学賞、慶應医学賞を受賞され、文化功労者にも選ばれています。2016年3月には、これらの4つを「まとめてお祝いする」という失礼ながらも贅沢な祝賀会も開催しました。その後もワイリー賞、国際ポール・ヤンセン生物医学研究賞などを次々と受賞され、「次はノーベル賞までをまとめてお祝いしましょうか」と半ば冗談交じりに言うほどに気運は高まってきていました。しかし、実際には、もう少し目に見える社会貢献があってからの受賞であろうと油断していたことは否めません。たとえば、2004年にノーベル賞に輝いたユビキチンの場合は、多くの疾患の原因にユビキチン系の遺伝子が同定され、プロテアソーム阻害剤が多発性骨髄腫に効果があることがわかってからのことだったからです。「もし大隅先生のノーベル賞受賞が決定すれば、夜9時のニュースに解説にいきます」とこのところ毎年NHKと約束をしてはいたものの、まだだいぶ先になるだろうと高を括っていました。それでも、さすがに今年はずいぶん違うという直感もあり、発表のある10月3日には自宅と研究室にスーツを準備しておきました。夜6時半の発表の約2時間前に、ノーベル財団から東工大

の大隅先生のところには連絡が入ったそうですが、私はそのころ呑気にも歯医者に行っており、もし大隅研からの連絡があったとしてもそれを受け損なっていたでしょう。何も知らないまま発表を待ちました。

6時25分頃から大学院生とともに研究室のお茶部屋のパソコンでノーベル財団の発表の瞬間を待っていると、インターネットの回線が不調になりアナウンスが途中で止まってしまいました。どうなっているのかと思っていると、教室の電話と私の携帯電話が一斉に鳴り出しました。電話に出ると、

「コメントを下さい」

「はっ？」

「大隅先生の受賞のコメントです」

「えっ！（絶句）でも私の画面ではまだ発表されていないんですが…」

本当に驚くと意味不明で間抜けなことをしゃべってしまうものです。あっという間に新聞やテレビの記者が研究室内になだれ込むように入ってきて、カメラやマイクを突きつけられました（写真1）。もちろんコメントなどは全く準備していませんでしたので、とっさにはなかなか気の利いたことが言えないものです。しかし、私が油断していた理由はオートファジーがまだ役に立っていないからであり、逆を言えば今回の受賞はその「役になっていない」部分が対象だということに他なりません。基礎研究者としては喜ぶべきことですので、そのようなことを記者の方々にもお話ししたと思います。

その場で記者取材や電話座談会などを行っている間も、研究室にある3つの電話回線は鳴りっぱなしです。教室のスタッフや大学院生がそれぞれに対応し、翌日までの予定を次々と決めてくれました（写真2）。夜の8時前に、準備



写真1 受賞決定直後の取材に対応する筆者（東大の研究室で）

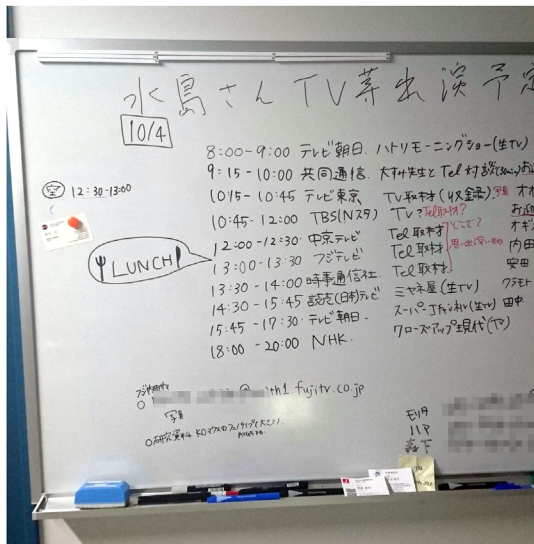


写真2 研究室のホワイトボードにつきつきと埋まる筆者の予定 (10月4日)

していたスーツに着替え、タクシーで約束通りNHKへ向かいました。すでにこの時点で自分の今後の予定は全く把握できなくなっており、大学院生の守田君に有能マネージャーとして同行してもらいました。NHKではディレクターの方やJSTの東美貴子さんと簡単に打ち合わせをし、その後強制的に顔に何かを塗りつけられ、袖で待機となりました。トップは沖縄に接近していた台風のニュースで、しばらくは現地の不安な状況が映し出されました。そして、いよいよです。「次は嬉しいニュースです」のアナウンスとともにスタジオの雰囲気が一気に明るくなり、大隅先生の顔写真とともに受賞決定の文字が画面に映し出されました。大隅先生ご本人の中継、ご自宅にいらっしゃる奥様萬里子先生のインタビュー、そして新橋のサラリーマンや渋谷の若者たちの祝福コメントなどを挟みながら解説が進みます。私たちもキャスターの方々の上手な誘導によってオートファジーの仕組み、大隅先生の業績、今後期待される展開などを解説しました。実は事前に用意されていたフリップの文字が「オートファゴソーム」ではなく「オートファボソーム」になっていたのも、台風のニュースがなかったらオートファボソームのままになっていたかもしれません。NHKを出ると、そのまま道路で待っていたTBSテレビの取材を受けることになりました(さすがにNHKの敷地内で取材はできないとのこと)。終わると今度はタクシーによってお台場のフジテレビへ移動です。こちらも生出演でしたが、このあたりから、オートファジーについての質問は最初のさわりだけで、あとは大隅先生の人柄、好きなもの、昔のことなどを次々と訊かれることとなります。この番組では、途中で大隅先生もテレビ出演され、二人で何か話して欲しいと言われたのですが、みんなが見ている前でテレビの中の大隅先生と話をするというのはいかにもごちなく、また大隅先生もすでにお疲れのご様子で、お祝いを申し上げたばかりはかなりギクシャクしていた

ことと思います。出演後はロビーでテレビ朝日と明日の打ち合わせを行い、タクシーで帰宅すると夜中の2時になっていました。すぐに床に就きましたが、なんとその夜は大隅先生がノーベル賞をとった夢を見ました。

翌4日はたまたま研究室内の1日かかりのミーティングを予定していたので、幸いそれだけをキャンセルするだけですみました。研究室メンバーは、大隅先生のノーベル賞決定と同じくらい、ミーティングが中止になったことを喜んでいました。朝6時前に電話でおこされ、何かと思ったら朝一番の出演がキャンセルとなったということでした。そういうことならもっとギリギリに知らせて欲しいと思いながらも起床しました。メールをチェックすると、国内外からのメールが読み切れないほどたまっています。この日も言われるがままに連れ回され、都内のテレビ局を1周以上しました。うれしいことに、時事通信社には東工大に連れて行っていただき(これも強制的にですが)、大隅先生と10分間の対談をする機会を得ました。ここで受賞決定後初めて直接お会いしましたが、大隅先生がいつも通りだったことに大変安堵しました。当たり前ではあるのですが、周囲の大騒ぎにはそう思わせないものがありました。

#### ノーベルウイークまで

大変なのは私ではなく、もちろん大隅先生の方です。発表の夜は自宅に戻れず大学に泊まれたそうですし、翌朝も早くから取材の連続です。その後も、安倍総理大臣との面談、文化勲章受勲など、想像を絶する事態になっていたと思われます。ほぼ毎日のように新聞やテレビで大隅先生の顔を拝見するのは、嬉しいというよりもむしろ心配になるレベルでした。しばらく前から大隅先生は「賞を取ることにについてはもうあきらめた」とおっしゃっていました。それはもちろん、賞を取りたいのに取れないという意味ではなく、賞がほしいというわけではないけれども賞がやってくるのであれば受け入れざるを得ないという意味です。ノーベル賞も覚悟はされていたと思います。何を言っているのかと思われるかもしれませんが、賞をもらうことによって大騒ぎすることよりも、静かに研究を続けたいというのが大隅先生の本心だと思います。このお祭り騒ぎを大隅先生がどのように感じていらっしゃるかと考えると、私も喜んでよいのかどうか悩むところでした。それでも、最近では「賞を取ることでサイエンスに貢献できることがあるのなら」、ともおっしゃるようになり、あきらめた効果も徐々にではおりました。その点では、ある程度準備されたところにノーベル賞が訪れたのはよかったと思います。

超多忙なスケジュールの中、11月15日には、越後湯沢で開催したオートファジー研究会・新学術領域研究「オートファジー」班会議にもお越しいただきました。オートファジー研究会は、岡崎の基生研時代に大隅先生ご自身



が始められたものでもあります（当時は自食作用研究会）。ご挨拶、写真撮影、運営会議、懇親会などにおつきあいいただき、若手研究者とのツーショット撮影などにも応じながらエールを送られました。地元メディアにもとりあげられました。オートファジー研究会が新聞に載るなどというのはこれまででは考えられないことでした。

今回大隅先生をひどく悩ませたのは、すでに米国のブレークスルー賞の受賞が決定していたことです。その授賞式はノーベル賞授賞式直前の12月4日と決まっていた。悩ましかったのは、この賞は授賞式当日まで受賞者を公表してはいけないことになっていることです。ノーベル賞受賞者は12月5日朝には現地入りしていないといけないのですが、ブレークスルー賞の授賞式に出席するとそれを果たせないことになってしまいます。しかし、それが言えないのです。そのため、12月初旬の大隅先生の予定は一切伏せられることになりました。これには日本のメディアが困りました。通常であれば「大隅さんがノーベル賞授賞式にむけて意気込んで成田を出発しました！」というような絵がニュースを飾るはずなのですが、大隅先生を捕まえられないのです。それでもあるテレビ局が大隅先生の羽田からの出発をとらえることに成功しましたが、ノーベル賞授賞式直前であるにも関わらず大隅先生は「ちょっと私用でアメリカに…」と意味不明の返答をしていました。なぜ大隅先生や東工大は直前の情報を明らかにしないのかと物議を醸しましたが、ブレークスルー賞の発表によって謎が解けたことと思います。これ以上の嬉しい悩みを人間がもてる可能性はほとんどないと思いますが、真剣に悩んでいたのは大隅先生のお人柄ゆえだと思えます。

## ノーベルウィーク

### 12月6日

ノーベル賞受賞者は1名について14人までの公式ゲストを招待することができます。このなかには配偶者は含まれませんが、その他のご家族は含まれます。かなり少ないという印象です。光栄なことに私も含めていただきましたので、12月6日にヘルシンキ経由でストックホルムに入りました。到着するとまだ夕方とは思えない暗さです。ホテルは受賞者と同じグランドホテルで、王宮が見える運河沿いの老舗ホテルです。ホテルには「Nobel Desk」という特別カウンター（写真3）が設置されており、大隅先生のスケジュール（小冊子になっています）や、私たちが出席できる各種イベントの招待状などを受け取ります。ノーベルの分厚い伝記を欲しいかどうか尋ねられましたが、要らないとは言えない雰囲気だったのでありがたく頂戴しました（後からいらっしゃった吉田賢右氏は「要らない！」と言ったそうで、さすがです）。サンフランシスコで行われたブレークスルー賞の授賞式経由でいらっしゃった大隅先生は、6日の午前中に恒例行事であるノーベル博物館の椅子の裏のサインを済ませていました。大隅先生は夜は別



写真3 スtockホルムのグランドホテルに設置された「ノーベルデスク」

日中はここに関係者の方がいて、ゲストの対応をしてくれます。

の公式行事に参加されていたためにお会いすることができず、ゲストの永田和宏氏、吉森保氏らとともに近くのレストランで夕食をとりました。この時期のストックホルムは寒くて暗いのですが、ノーベルウィークの間は予約しないとレストランも入れないくらいに賑わっています。ビジネスとしてとてもうまくやっているという印象です。

### 12月7日

生理学・医学賞の受賞講演が予定されている重要な日です。その内容は直ちに世界中に伝わるため、大隅先生はかなり前からスライドや原稿を準備されていたようです。午前中はその現地リハーサルなどです。大隅先生の出発を待ち構えて、グランドホテルの正面前には日本からの報道陣が集まっています。ホテル内は撮影・取材禁止なので、ドアをでてから、ノーベル財団の車に乗るまでのわずかなメートルが唯一の取材のチャンスなのです。

一方の私たちと言えば気楽そのものです。大隅研の中戸川仁氏も合流して、午前中は燕尾服を調達に行きました。数日前の日本のテレビでも「大隅さんが授賞式で着る燕尾服はこちらです！」ととりあげられていた財団推薦の店です。店に入ると、机の上のノートに大隅先生のサインがあったので店長に尋ねたところ、「Ohsumiは昨日来たよ。大量のカメラと一緒にね！」と返事が返ってきました。日本の取材は呆れるというよりも興味深い対象のようです。授賞式と晩餐会はタキシード（black tie）ではなく燕尾服（white tie）がドレスコードとなっています。あらかじめ日本からサイズを伝えておき、あとはその場で店員が手際よくミシンを使って微調整してくれます。店内にはおびただしい数の燕尾服がぶら下がっており、店員曰く今年のレンタルは160着だそうです。

燕尾服をぶら下げていったんホテルに帰り、午後は講演会場であるカロリンスカ研究所にバスで向かいました。ここで他のゲストの方々（東工大の三島良直学長や海外か

らのゲストたち)と一緒にあります。講演会場は超満員です。寒い中、建物の外で並んでいたにも関わらず入れなかった一般参加者もいたと聞きます。生理学・医学賞の関心はそれだけ高いのでしょう。

レクチャー前のスクリーンには昔の大隅研の様子がスライドショーで映されており、若い頃の自分たちの写真を見つけてはみんなではしゃぎました。アナウンスとともに大隅先生ご夫妻が入場されると、まずは会場の中央の席に案内されました。紹介のあと、大きな拍手とともに大隅先生はゆっくりと会場内を歩いてステージに登壇されました。レクチャーでは、大隅先生ご自身の幼少時、日本がまだ裕福でなかった時代背景やご家族のことなどから始められ、一般の方にもわかりやすい酵母や液胞の話、酵母オートファジーの発見、その後のオートファジー研究分野の展開へと話を進められました。私ごとではありますが、自分自身が20年近く前に行ったウェスタンプロットの実際のデータがノーベルレクチャーのスクリーンに映し出されたときには感無量でした。実は、大隅先生はレクチャーの出だしはやや緊張されているように見受けられました。ポインターを使ってスライドを説明されましたが、そのポインターが多機能型だったのが誤算でした。レーザーのボタン以外にも、「進む」、「戻る」などのボタンもあるタイプだったのです。大隅先生はそれらを間違えて一通り押してしまったので、スライドは前や後に次々と変わってしまいました。そして、どうやら最後には「消す」ボタンまで押してしまったようです。スクリーンからパワーポイントスライドが消えてしまいました。日本であれば係の人が飛んで出てくるでしょうが、いっこうに誰も助けくれません。静まりかえった会場でみんな見守る中、「what's happening」と言った大隅先生の言葉に聴衆がどっと笑い、そこで聴衆との距離が一気に縮まりました。大隅先生と言えば、本物のスライドを使っていた昔は、スライドが上下左右するのは有名な話で、それを思い出すといかにも大隅先生らしかったと言えます。ようやく係の人がスライドを直してくれれば、なめらかに、かつ格調高く講演は再開しました。終盤には、オートファゴソーム形成に関わる分子複合体の構造と機能に関する遠慮なしのハイレベルなデータを、コンピュータグラフィクスとともに披露されました。一般の聴衆にはおそらく理解できなかったと思いますが、私はこの部分を含めたのは大正解だったと思います。これこそが大隅先生の研究であり、それを短時間でも触れられた当日の聴衆は最高のものを見ることができたと思います。最後は、基礎研究が文化としてとらえられることを願っているという思いを述べて締めくくられ、会場総立ちの大喝采となりました。

これでリラックスされたのか、その晩は、永田氏、吉森氏らとともに大隅先生のスイートルームにお招きいただきました(あるいはこちらから押しかけたというほうが正しいかもしれません)。ルームサービスで料理やワインを注文し、奥様の萬里子先生もご一緒となって楽しいひととき



写真4 ノーベルレクチャー終了後の夜、大隅ご夫妻の部屋で慰労会？

永田和宏氏、吉森 保氏らとともに。

を過ごさせていただきました(写真4)。ブレイクスルー賞から休みなく行事が続いていたのでさぞお疲れとは思いましたが、レクチャーが終わって大隅先生も一段落というようにお見受けしました。

#### 12月8日

午前中は私一人でノーベル物理学賞のレクチャーを聴きに行きました。今年は、物質のトポロジカル相とトポロジカル相転移についてです。最も貢献したサウレス氏は体調が良くないらしく残念ながら講演はされず、残りの受賞者2名のみ講演となりました。はじめから微分方程式の連続という難解な講演でした。しかも「受賞決定後忙しすぎてわかりやすいスライドを準備できなかった」と言い訳しながら時間を大幅に超過する有様で、最後は司会者に中断させられた形になりました。昨日の大隅先生とは対照的なノーベルレクチャーでした。

午後は日本大使館主催のレセプションがグランドホテルでありました。豪華な会場の後方2階から、音楽とともに華麗に大隅先生ご夫妻が登場となりました。凝った演出に祝福ムードが高まります。山崎大使のご挨拶に続いて、大隅先生のお話がありました。昨日のレクチャーでスライドが止まったことを自分らしかつと振り返られたため、また会場が和やかになりました。他には挨拶などが一切ない形式張らないリラックスした会でしたので、スウェーデン在住の日本人の研究者など参加者にも大隅先生とお話できる機会が持てたと思います。

レセプションが終わると、次は吉森氏とともにノーベル博物館で取材を受けました。そこで例の椅子のサインを見ましたが、なんと文字のインクが垂れているではありませんか(写真5)。あとで聞いたところによると、サインした後、まだ乾かないうちに写真撮影となって持ち上げたところ、インクが垂れてしまったようです。それもまた大隅先生らしいと言っては失礼でしょうか。さらに、まだ公開前でしたが、大隅先生が博物館に寄贈したフィギュアを係員が見せてくれました(写真6)。といってもそれらを見



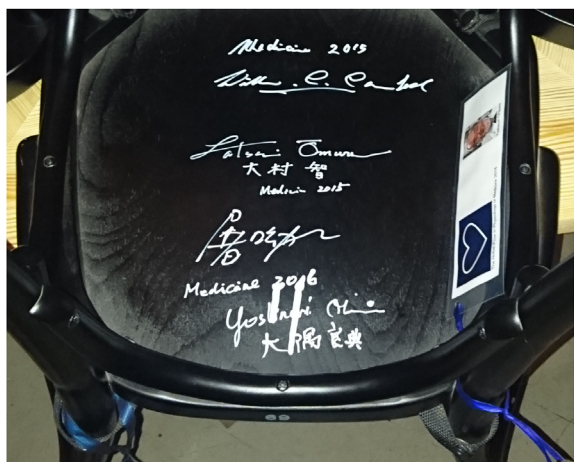


写真5 ノーベル博物館の椅子の裏のサイン  
大隅先生のサインはインクが垂れてしまっています… 同じ椅子の上部には昨年の受賞者であるWilliam Campbell氏、大村智氏、屠呦呦氏のサインがあります。



写真6 ノーベル博物館に寄贈されたフィギュア  
上は顕微鏡の前に座る大隅人形。下はAtg8とAtg12-Atg5-Atg16複合体の構造模型。

るのは初めてではありません。実は、門下生一同が以前大隅先生にプレゼントしたAtg8とAtg12-Atg5-Atg16の分子構造模型と、顕微鏡をのぞいている大隅先生のミニチュアだったからです。ここに展示されていればずっと保管されるでしょうからグッドアイデアです。あとは、日本でもおなじみのノーベルチョコレートを忘れずに買って帰ることにしました。あまりに日本人が頻繁に買うので、いまでは日本人店員が常駐しているとのこと。

ノーベルウイークの受賞者は多忙ですが、ゲストも毎日行事があります。この日の夜はノーベルコンサートでした。ジャンンドレア・ノセダ指揮、ロイヤル・ストックホルム・フィルハーモニー管弦楽団の演奏による、ワーグナーのさまよえるオランダ人序曲、ブラームスのヴァイオ

リン協奏曲、ベートーヴェンの第6交響曲でした。ヴァイオリンは私が好きなヴァイオリニストのひとりジャンヌ・ヤンセンでしたが、実は急なプログラム変更による予期せぬ喜びでありました。ノーベル賞受賞者とゲストの一行は二階席の後方に左右に分かれ、2階席中央はおそらく王室関係、1階は一般参加者の席のようでした。ブラームスの協奏曲の第1楽章後半のカデンツァでは、ヤンセンのヴァイオリンの最弱音が、私たちの2階後方まで一直線に届くように伸びてきます。その繊細さには、まさに息をのんで聴き入りました。2楽章、3楽章も見事ですから満喫しました。さらに圧巻だったのはベートーヴェンでした。第6交響曲はベートーヴェン自らが「田園」と名付けた唯一の標題付き交響曲として有名です。全体は5楽章からなり、第3楽章以降は切れ目無く続けて演奏されます。この日の演奏は実にすばらしく、特に第3楽章以降の弦楽器の切れ味は抜群で華やかでした。第4楽章の嵐が過ぎ去ったあとの第5楽章の冒頭、第一ヴァイオリンが静かで美しい第一主題を奏でるところでは全身に鳥肌が立ちました。その後次々と変奏が現れながら高揚していくこの楽章は、まるでオーケストラメンバーが大隅先生を含むノーベル賞受賞者をかわるがわる祝福しているように感じられました。ベートーヴェンはこの第5楽章に「嵐の後の喜ばしい感謝の気持ち」という標題をつけています。偶然かもしれませんが、大隅先生への感謝の気持ちに包まれたコンサートという気がしました。この晩、田中啓二氏、吉田賢右氏も日本からストックホルムに駆けつけました。

## 12月9日

この日はきれいに晴れました。それまでは毎日が曇りでしたし、この時期午後3時過ぎには暗くなってしまうため、ストックホルムがどういうところか十分に感じ取ることができなかったのです。でも、この日になってようやく、海や運河、青い空、旧市街の町並みが調和した美しい町であることがわかったのです。ゲストは夕方まで予定がなかったので、現代美術館に行くなどして普通の観光客らしく過ごしました。

夜は、いよいよ授賞式前日のノーベル財団主催の公式レセプションです。気温は一気に下がり、コートを着たままバスに乗り込みます。会場は、ノルディック博物館です。どんなにすごいレセプションだろうかと期待して臨んだのですが、これはとてもあっさりとしたものでした。博物館の1階の広いホールにカナッペとワインがあるだけで、祝辞やイベントは一切ありません。溢れんばかりの人の数です。実はこれを含めてすべてのイベントは有料ですので、やはり真冬のビジネスとして見事に成立していると何度も思いました。また、今回、いろいろと参加して感じたのは、どの会も比較的あっさりしているということです。挨拶などは最小限で、むしろ参加者同士が楽しむというようなスタイルが多かったと思います。物理学賞や化学賞の受賞者も普通にレセプション会場内を歩いていますし、カロ



写真7 ノーベル賞受賞者に1台つけられるハイヤー  
(これは授賞式とは別の時の写真です。)

リンスカ研究所の研究者からはミトコンドリアのオートファジーについて質問を受けたりもしました。ノーベル賞といえども、毎年やっているとそれほど特別なことではないのかもしれない。

夜のレストランは予約していなかったのでどこも見つからず、最後はホテルそばのオペラ座にくっついている小さなバーのカウンターで、日本人ゲストたちで前夜祭を行いました。

## 12月10日

いよいよ授賞式の日となりました。昨日と打って変わって、朝から雪です。道路にもうっすらと積もっています。昼過ぎ、試行錯誤しながらなんとか燕尾服に着替えました。私たちゲストは、大隅先生より一足先にバスで授賞式が行われるコンサート会場に行きます。大隅先生ら受賞者には期間を通じてノーベル財団からハイヤーが1台支給されており、大隅先生ご夫妻はそれで会場入りとなります(写真7)。到着してみると2日前のコンサートとは様子が一変しており、ステージには青いカーペットが敷き詰められ、ステージ後方の客席はオーケストラ用に姿を変えていました。ステージの右側にはスウェーデン国王、ノーベル財団関係者が座り、左側は前方に受賞者、後方に過去の受賞者が座ります。授賞式も指定席で、私たちは最上階である3階席でした。コンサート会場の普通の椅子なので、燕尾服の尻尾のような部分の収まりが悪く、立ったり座ったりする度に、その部分が折りたたまれる椅子に挟まるのでした。

いよいよ受賞者が入場すると、まさにそこはテレビで見慣れている光景そのものとなりました。物理学賞、化学賞、生理学・医学賞、文学賞、経済学賞の順番によれば舞

台中央でメダルを受け取ります。受賞者の紹介はスウェーデン語でされます。私たち参加者には英語の翻訳が渡されているので何を言っているのかわかりますが、ステージ上の大隅先生には全く理解できなかったと思います。分かるのは、「オースミ」、「リソソーム」、「オートファジー」くらいでしょうか。スウェーデン語の長い紹介が終わると、英語で「I now ask you to step forward to receive your Nobel Prize from the hands of His Majesty the King」と舞台の中央に来よう促されます。そこで大隅先生は国王からメダルと盾を受け取られ、しっかりと握手をされました。トランペットがファンファーレを奏でます。大隅先生が聴衆に向かってうなずくように挨拶をされ、会場は大きな拍手で包まれました。この時こそが、大隅先生がノーベル賞を受賞したと真に実感した瞬間でした。思っていたよりも時間がゆっくりと流れる式典だったので、それをじっくりとかみしめることができました。

今回のノーベル賞のもう一つの話は文学賞のボブ・ディランでした。授賞式は欠席でしたが、友人である歌手のパティ・スミスがギターを伴奏にボブ・ディランの歌「はげしい雨が降る」を披露しました。よほど特別な雰囲気だったのか、大歌手パティ・スミスの歌が途中でとまってしまう「Sorry, I am so nervous」と謝るハプニングがありました。それでも会場の温かい拍手によって再開し、無事に歌いきりました。彼女はもともとこの授賞式で自分の曲を歌うことを依頼されていたものの、ボブ・ディランが受賞したことによって曲目を変更したということを知りました。

授賞式が終わると、晩餐会の行われる市庁舎に移動となります。何台ものバスがコンサート会場の前で列をなして待っており、雪が舞う中、授賞式の興奮をみんなで話しながら乗り込みます。ここでは、オートファジーの研究をしているノルウェーの友人にばったりと会いました。公式ゲスト以外にも、北欧のアカデミーのような関係で招待されている研究者がいるようです。

授賞式はストックホルム市庁舎の「青の間」で行われました。天井が空のように見える大きなホールに1000人を超す参加者が集うという規模です。座席表が書いてある小冊子をうけとり、索引で自分の名前を調べて席を探します。正直なところ、座席はぎゅうぎゅう詰めという印象で、となりや正面がかなり近いです。中央付近は男女交互に座ります。私の右隣はカロリンスカ研究所副所長のKarin Dahlman博士で、大隅先生の受賞講演で最初に挨拶された偉い方でした。左隣はアルバート・アインシュタイン大学のAna Maria Cuervo博士でオートファジーの同業者です。同世代で、20年近くも知り合いなので左側は気楽でした(写真8)。テーブルの他の方々の多くはスウェーデン人で、もと市長、教育関係の方などいろいろです。みなさん、首から何か掲げているので、それぞれの分野で表彰された方々かと予想しました。しばらくすると、音楽とともに受賞者が二階から階段をゆっくり降りてきます。大





写真8 晩餐会での写真  
中央はAna Maria Cuervo氏、右は吉森保氏。手に持っているのはノーベルチョコレート。

隅先生も落ち着いていらっしゃり、ノーベル賞受賞者らしい風格が漂っています。

まず全員で起立して国王に乾杯します。スウェーデン式の乾杯はグラスを合わせず、お互いに相づちをうつような感じです。座るとまたすぐに起立させられ、今度はなにかと思ったら、ノーベルに乾杯です。ちなみにスウェーデンでは、「ノーベル」ではなく「ノベール」とみんな発音していました（英語もたぶんそうだと思います）。それからやっと食事が始まりますが、前菜が1皿、メインが1皿、デザートが1皿の合計3皿です。これを4時間かけて食べるのです。今回は、「和」の要素が取り入れられており、デザートにはスタチや味噌も入っていたようです。食事の間には、フルートとクラリネットと10数人の弦楽器からなる楽団が、激しく動きながら「curiosity」をテーマにしたようなモダンな演奏を披露しました。

晩餐会が終わりに近づくと、各賞の受賞者代表からスピーチがありました。物理学賞はホールデン氏が代表でスピーチされ、講演とは違って笑いをとっていました。生理学・医学賞は大隅先生が単独受賞ですので、当然ご本人のスピーチです。大隅先生も負けじと、研究材料として酵母を使ってきたことを話された後に、「私はお酒が好きです」と付け足し、会場を笑わせていました。王室の方々が出席されている格調高い晩餐会でしたが、受賞者のみなさんの普通らしさがでた最後のスピーチとなりました。

晩餐会が終わると、まず受賞者が入場の時と同じ階段を上って2階へエスコートされます。このとき、着物姿の萬里子先生が私のちょうど頭上を通過されました。普段は控えめでいらっしゃるのですが、このときは笑顔で下に手を振られていたのがとても印象的でした。その後私たちも2階へ上がると、最初の部屋では有名な舞踏会がすでに始まっていました。大隅先生はそちらには参加されずに、他の参加者の方々とはしばらくお話になっていました（写真9）。その場に、ノーベル賞のメダルと盾が飾ってあったらしいのですが、残念ながら私はそれに気づかず、見る機会を逸してしまいました。



写真9 晩餐会終了直後の大隅先生と  
大隅先生は先日授章された文化勲章を首から提げていらっしゃいました。左は吉森氏。

ホテルに戻るとすでに11時を過ぎており、夢のような長い1日が終わりました。授賞式の翌朝、朝食会場で大隅先生と会うことができ、最後にお礼をお伝えしました。大隅先生は、翌日以降も王宮での晩餐会、現地小学生との交流などが残っていらっしゃるようで、あと2泊されるとのことでした。本当にお疲れ様です。

#### おわりに

帰国すると、ノーベル賞関係のニュースも一段落しており、年末らしい雰囲気もでてきたためか、すべてが落ち着きを取り戻しつつあるように感じました。私は大隅先生が紅白歌合戦に審査員として出場するのではないかと予想していたのですが、それもありませんでした。

大隅先生は一貫して、基礎研究というのは、それが役に立つかどうかとは別の尺度で、つまりはひとつの文化として理解され、支援されるべきであるとおっしゃっています。これはノーベル賞を受賞する前からおっしゃっていたことでしたが、ノーベル賞受賞以降はメディアで頻繁に取り上げられたので、耳にすることも多くなったと思います。なまじ役に立つ可能性のある生物学だからこそ、すぐには役に立たない部分の生物学をどのようにとらえるかはとても重要な問題です。大隅先生の発言は、基礎研究を対象としている日本生化学会にとっても心強く、同様の思いで研究されている会員も多いと思います。今回のノーベ

ル賞受賞によって基礎研究の重要性がより認識されるのは嬉しいことです。しかし、どの分野がノーベル賞をとるかということによって、日本の科学の目指すところが極端に影響をうけるのも一方でどうかと思うところがあります。2015年は本会評議員である大村智先生がノーベル賞を受賞され、ひとつの薬の発見が多くを命を救う見事さに感銘を受けたのは記憶に新しいところです。基礎生命科学者が

今何をすべきか、今何ができるかを自分たちで考えることが大事だということを感じさせられた約2ヶ月間でした。

なお、ノーベル財団による行事は公式ホームページで閲覧可能ですのでどうぞご覧下さい (<https://www.nobelprize.org/>)。